

News Letter No.26

19年 5月21日(月) 発信

Sato Project

Sato Project

農業が環境を破壊するとき—ユーラシア農耕史と環境—
「里」プロジェクト

お問い合わせ

総合地球環境学研究所佐藤研究室 (大島) e-mail:mihosma@chikyu.ac.jp

〒603-8047 北区上賀茂本山 457-4 Tel:075-707-2384 Fax:075-707-2508



現在相国寺では伊藤若冲展が開かれています。(老松白鳳図)

<http://jakuchu.jp/jotenkaku/point.html#m01>

「野生エンマーコムギの100年」

河原太八 (京都大学農学研究科)

野生エンマーコムギの 100 年

河原太八（京都大学）

この4月16日から20日まで、イスラエルで行われた研究会に参加してきた。会の名前は、”The Aaronsohn - ITMI International Conference”である。うしろの方の“ITMI”は“International Triticeae Mapping Initiative”で、日本語では「国際コムギ連マッピング協議会」とでも呼べば良いだろうか。人類にとって重要な作物であるオオムギとコムギは、イネ科のコムギ連というグループに属するが、これらの育種のために各国の研究者が共同で、重要な遺伝子の地図を作ろう（マッピングを行う）という趣旨である。

初めの Aaronsohn は人名で、Aaron Aaronsohn (1876-1919)、野生のエンマーコムギを発見した人である。ちなみにアロンは、預言者モーゼの兄でヘブライ人最初の大祭司であり、姓名ともにそれにちなんだ名前になっている。このことから分るように、Aaronsohn の両親はルーマニアに住んでいたユダヤ人で、Aaron が6才の時に当時オスマントルコに支配されていたパレスチナに移民している。

さてコムギは昔から西欧で重要な作物であるが、今から100年ほど前はまだまだ謎の多い植物であった。ラージスペルトあるいはディンケルと呼ばれていたコムギ（普通系コムギ）は野生では見つからず、エンマーコムギの野生種も無く、一粒系（モノコッカ



写真1. 野生エンマーコムギと野生オオムギ（白っぽい穂）コムギだけが野生でも見つかったが、これをほかのコムギの祖先と言うには形が

あまりにも違っていた。ところが、Kotschy が 1855 年にシリアのヘルモン山で採集した野生のオオムギの標本を、ウィーンの国立腊葉館で 1873 年に調査した Körnicke は、そのなかに野生のコムギ属 (*Triticum*) の穂があることに気がつき、これをコムギの変種 (var. *dicoccoides*) として 1899 年に発表した。そこで多くの人が生きている野生エンマーコムギの探索をしたが、最初に発見したのが Aaron Aaronsohn で、場所は聖書で有名なパレスチナのガリラヤ湖の少し北、シリア (現在はイスラエル) の Rosh Pina で、1906 年 6 月のことであった。このとき Aaronsohn は、30 才だった。この発見により、



写真 2. カラスムギと野生の春菊

Aaronsohn は一躍ヨーロッパやアメリカの植物学者に知られるようになったが、この点については多少の注釈が必要かもしれない。



↑ 写真 3. 野生のルナリア



→写真 4. 改良されたルナリア (園芸植物です。研究室にて)

キリスト教の世界 (とくにカトリック) であるヨーロッパやアメリカでは、パンは単なる食べ物ではなく、神イエス・キリストの肉としての象徴的な価値も持つ。栽培のエンマーコムギや普通系コムギに近い植物が、野生の状態で、しかも聖書の舞台であるパレスチ

ナで発見されたのである。このため Aaronsohn は 1909 年にはアメリカの USDA (アメリカ農務省) からの招待を受け多くの知己を得るとともに、その活動についてアメリカのユダヤ人の団体からの支援を受けることが可能になった。彼は帰国後、農事試験場をつくり、農業生産向上のため様々な活動をするようになるが、1914 年の第一次世界大戦勃発が活動の継続を不可能にした。

ところで栽培植物の起源地はどこかということは、これまでしばしば「身びいき」に直面してきた。ある作物が自国で起源したとなると、その説を発表した研究者は有名人になる。これに政治的・宗教的思惑が絡むと、いっそう複雑である。栽培エンマーの起源は、これまで大きく二つの候補地があった。一つは「肥沃な三日月地帯」の中央にあたるトルコ南東部で、もう一つがイスラエル (パレスチナ) である。宗教的な見方をすると、イスラム圏かパレスチナかと言うことになり、一般の人の受け取り方はおのずと違ってくるだろう。

さて、今回の ITMI は Aaronsohn の発見を記念するものでもあり、当然栽培エンマーの起源地の研究もあったが、野生エンマーの発見から栽培起源地の決定まで 100 年かかったことになる。その場所は、以前に神戸大学の森さんがこのニュースレターに書いているトルコ南東部の Karacadag である。長い間イスラエルの研究者は、自国が起源地であると主張し続けてきたが、さすがに今回は反対の意見は無かった。ちなみにその論文を書いたのは、アメリカ在住の中国系 3 名・英国人 1 名・チェコ系 1 名、そして日本人が 1 人という混成チームである。Aaron とその一家はイスラエルでは、野生エンマーコムギを発見した偉い人とその家族というだけでなく、もう一つ別の評価を得ている。研究者として活動できなくなった Aaron は、1915 年にオスマントルコに対抗する秘密結社 NILI (Nezah Israel Lo Ieshaker (Hebrew), Jewish Eternity shall not lie) を結成し、エジプトのカイロに住んでその指導に当たることになる。この結社はイギリスと協力し、トルコの情報を提供す

ることで、ひいてはパレスチナの独立を果たそうとするものであったが、彼自身は1919年

5月15日パリでの講和会議に

向かう途上、飛行機事故のため

英仏海峡で亡くなった。彼の妹

で、パレスチナに残りNILIの

指導を続けていた Sarah

Aaronsohn (1890-1917) は

1917年の秋、トルコ軍に捕ら

えられ3日に渡って尋問を受け

写真5. Aaron と Sarah の生家

たが、組織の秘密を漏らすことなく、一時的に戻ることを許された自宅で拳銃自殺した。

彼らが育った家は、いまは資料館となり公開されている。

